



第6号  
 社団法人  
 上田高等学校同窓会  
 昭和45年10月18日発行  
 印刷所  
 祥文堂印刷所

# 母校創立七十周年

## 記念祝賀会盛大に開催

### 秋季総会を兼ねて

上田高等学校は昭和四十五年で創立七十周年に達したので、十月十八日午前九時半より同窓会館で、同窓会秋季総会を兼ねて祝賀会を開催することに決定された。創立七十周年記念祝賀会は映画「武將の町」(田中豊雄氏制作)の上映後、「一九七〇年代の日本の経済」(宮下武平氏(三十回卒)の講演があり、引続き祝賀式が開催され、終つて盛大な祝宴が行なわれる予定。

当日は上田高校同窓会関東支部より稲垣支部長、矢島幹事長が五十名の支部会員と共に列席し、来賓として東信地方の各高等学校同窓会長、小山上田市長、新旧上田高校職員を招待している。このため、劃期的な会合となる見込である。祝賀式では柳沢理事長より七十周年記念事業として

### 長野県高等学校 同窓会連合会

#### 柳沢会長再選

昭和四十三年十一月十日発行の同窓会簿は、同窓会館の取得実施する計画が発表される。同窓会簿は明年秋迄に発行を行ない、其の他の事業は期成同盟会をPTA、学校と結成の上実施することになるが、校舍改築は昭和五十一年度迄長野県教育委員会が実施計画を作成しているの、それ以後になる見込である。

### 維持会員増加

同窓会館は毎年五百円を寄附する同窓会の維持会員により維持されてをり、昨年より維持会員費四十六万八千五百円に達し、これにより会館維持が達成されている。本年度は九月現在三十三万円に達する会費が集められて、特に本年は東洋信託株式会社と契約し、一万円の金銭信託券を購入し、

### 昭和四十五年春季総会

#### 林東大教授講演

昭和四十五年五月三十一日午後二時より、春季総会が同窓会館で開催され、映画「赤魚の川」「風雪の岬」(田中豊雄氏製作)鑑賞後、東京大学文学部教授林健太郎博士の「大学問題と将来の日本の教育」の講演があり、出席者に多大な感銘を与えた。

引き続き議事に入り、昭和四十四年の事業報告として、四十四年五月二十五日NHK解説委員家城啓一郎氏による「現代の大学問題」の講演会、十二月十四日田中豊雄氏(三十六回卒)カン又国際映画入賞記念後援会主催に参加し、秋期総会に代えた事、奨学資金として十名に月額千五百円を貸与し、三月十四日卒業式に於いて成績優秀者(定時制)山極悦雄に同窓会賞を授与し、極悦雄に同窓会賞を授与し、昭和四十四年度決算収入二百拾万七千六百八十四円、支出百七拾九万八千四百二十八円が承認された。収入の部に於いて勝俣稔氏より拾万円の寄附があつたと感謝報告があつた。

#### 名簿発行決定

同窓会名簿は母校創立五十周年、六十周年と拾年ごとに作成されてきた。今回七十周年事業として名簿を発行するが、六十周年に発行した名簿は訂正に訂正を重ね、現在では殆んど役立たない状態であり、卒業料があるが、それ以後は移動が甚だしく、特に五十五回卒業期以後の資料は不完全である。この際各期毎に資料の提出を明年三月三十一日迄に願ひ、秋には完全な名簿を発行したい。発行価格は一部二千元(送本料を含む)、前金で予約者へのみ配布する予定で、近日予約者募集に着手する。

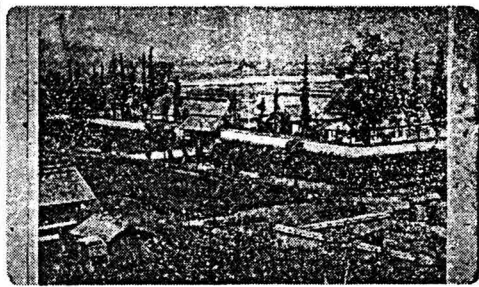
豊かな暮しとおしゃれに  
 奉仕する…  
 ファミリーストア  
**はなおか**  
 上田市海野町 TEL 7600  
 社長 花岡数幸 (13回)  
 副社長 花岡正人 (48回)  
 専務取締役 花岡忠雄 (50回)

あなたが主役  
 株式会社 **ほてのや**  
 上田市中央一番街 電話代 ②8181  
 取締役社長 成 沢 守 雄 (51回)  
 常務取締役 町 田 吉 司 (47回)

# 古稀の長野県上田高等学校

社団法人上田高等学校同窓会

理事長 柳 沢 文 秋



「人生七十年古来稀なり」は中国の詩人杜甫の詩の言葉であるが、今日では人生七十年も決して稀れではなくなつた。しかし上田高等学校も本年七十周年になつた。県下の高等学校として上田高等学校の歴史を回顧して見たい。

上田藩は教育に熱心であつた。従つて明治五年の学制公布により藩学校は明治六年九月一日松平学校となり、十月街学校、十一月常盤城学校、十二月崩山、常田の小学校が出来、明治十九年に五校が合併し、男女二校の小学校が発足して、明治七、八年の頃小学校に上科科生徒を有した小

学校卒業生を収容するため明治十一年六月変則中学校が鍛冶町町窓寺に設けられ、やがて明治十五年四月郡立小中中学校が設置された。明治十七年郡立中学校が廃止され、長野県中学校が出来、松本、上田、飯田の三ヶ所に支校がおかれ、更に十九年九月制度変更により一府県二中学となり松本に尋常中学校がおかれ、上田支校は廃止され、明治二十六年再び松本を本校とする長野県尋常中学校が復活し、三

支校は上田町常盤城の上田尋常小学校常盤城分校の中にあつた。明治二十九年三月二十五日、常盤城から現在の場所に移転した。ここには旧藩時代の城門があり、校地の南側半分は小泉高等小学校北側に小泉蚕業学校があつた。常時の写真を掲げるが写真では遙かに千曲川が望める。明治三十三年一月蚕業学校が常田に移転する迄、同一敷地に二中学が同居していた。

明治三十二年四月長野県尋常中学校が長野県松本中学校となり、同時に長野県長野中学校が独立し、上田支校は長野中学校上田支校に改められた。このために帽章の「蜻蛉中」は「鷹中」に改められた。小泉蚕業学校が移転した明治三十三年四月

長野県上田中学校が独立し「中学」の校章を作る。四月十六日入学式、十七日開校式が行なわれ、初代校長に宮本右次氏が就任した。従つてこの年が一九〇〇年であるから本年は創立七十年になる。この七十年間に長野県上田中学校より長野県上田松尾高等学校、長野県上田高等学校に変換したことが多く、英材が出現したことに就いては省略する。七十周年を顧りみて、明治

の始め上田町は教育が県下で最高の教育をしていた事実を最初に指摘したが、現在上田市の高等学校教育は当時と比較して果下で如何なる地位にあるだろうか。この点を古稀の祝典に当たりに生徒、教師、同窓会員とともに謙虚に反省したい。

意欲が変わると、表に現われる形も変わる。十年一昔という言葉があるが、ほぼ二昔前の生徒は微草のついた学生帽をかぶること何らの疑問も抵抗を感じていなかったと思う。だが今日では学生帽をかぶつて登校する生徒は全く寥々たるものである。服装も準備期間を終えて近く自由にのぞきさと思わざるをえな

い。だがこうした状況の中に在って毎年四月に新入生に渡される生徒会製作の生徒手帳には、きまつて校門の写真が載つてゐる。私はこの写真掲載に生徒諸君がどういう意図を持ち自覚しているかを詳らかにしてない。しかし私はこのことに深い興味を覚えてならない。今日一部の諸君にはあの校門はのろろべき封建制の遺物としが残りながらも、いづれは世の権力が巧みに仕組んだ抑圧の偽装に過ぎないといふかも知れない。だが年々歳々校門の写真を載せて新入生に生徒手帳が渡るのである。このことは由来上中魂とか上高精神といわれて来たものを端的に校門を以て象徴しようとする神とであらうか。魂とか精神といふものにはどのような言葉を尽しうるものではない。だからといってこれに済してはいけないのである。上田の卒業生はだれもが他の野沢や長野の卒業生とは違つたものを持つてゐる。私はこのことを実感している。だがそれがなんであるかを今ここで論明することはできない。この本校でなくては体得し形成しえないもの、このものを何として

も明らかにしたいものであつた。これが明らかになれば上中魂、上高精神といわれたい。とであらう、学術かどうに変わり、校名が如何に変わつても変わらないものを変えてはならぬものがあるはずである。それをいつかりとわからせることが我々に課せられた重要な教育的課題だと思ふ。

社団法人上田高等学校同窓会

## 随感

長野県上田高等学校長 小林 俊 直

私はたまたま昭和二十八年十一月の体育館、音楽室の落成祝賀式のことを思い出して、今校門を入つて右手にある体育館は当時は県下最大であり、その後の県下各高等学校体育館建設の魁でもあつた。この体育館を自分たちの手で建設した喜びと誇りが参会者のだれも顔に溢れて祝賀は盛大であつた。今は亡き故宮入清四郎博士の奇術に拍手が湧き起こつたことが鮮明に印象に残つてゐる。今日、七が

変わればその意義も変わる。意識が変わると、表に現われる形も変わる。十年一昔という言葉があるが、ほぼ二昔前の生徒は微草のついた学生帽をかぶること何らの疑問も抵抗を感じていなかったと思う。だが今日では学生帽をかぶつて登校する生徒は全く寥々たるものである。服装も準備期間を終えて近く自由にのぞきさと思わざるをえな

い。だがこうした状況の中に在って毎年四月に新入生に渡される生徒会製作の生徒手帳には、きまつて校門の写真が載つてゐる。私はこの写真掲載に生徒諸君がどういう意図を持ち自覚しているかを詳らかにしてない。しかし私はこのことに深い興味を覚えてならない。今日一部の諸君にはあの校門はのろろべき封建制の遺物としが残りながらも、いづれは世の権力が巧みに仕組んだ抑圧の偽装に過ぎないといふかも知れない。だが年々歳々校門の写真を載せて新入生に生徒手帳が渡るのである。このことは由来上中魂とか上高精神といわれて来たものを端的に校門を以て象徴しようとする神とであらうか。魂とか精神といふものにはどのような言葉を尽しうるものではない。だからといってこれに済してはいけないのである。上田の卒業生はだれもが他の野沢や長野の卒業生とは違つたものを持つてゐる。私はこのことを実感している。だがそれがなんであるかを今ここで論明することはできない。この本校でなくては体得し形成しえないもの、このものを何として

も明らかにしたいものであつた。これが明らかになれば上中魂、上高精神といわれたい。とであらう、学術かどうに変わり、校名が如何に変わつても変わらないものを変えてはならぬものがあるはずである。それをいつかりとわからせることが我々に課せられた重要な教育的課題だと思ふ。

社団法人上田高等学校同窓会

## 幹事会発足経過

社団法人上田高等学校同窓会

- 第一条 この会は上田高等学校同窓会幹事会と称する。
- 第二条 この会の事務所は上田高等学校同窓会館に置く。
- 第三条 この会は上田高等学校同窓会の事業を援助する事を目的とする。
- 第四条 各卒業期別にその所属する同窓会員が上田市長在の代表者(二名)を推薦する。
- 第五条 同窓会理事長は各卒業期別に推薦された代表者を幹事として委嘱する。
- 第六条 同窓会幹事会は各卒業期については同窓会理事長が適宜幹事を委嘱する。
- 第六條 この会の会費は同窓会理事と幹事と合同開催する。
- 第七條 この会の会費は同窓会理事長が召集し議はその都度互選する。
- 第八條 この会には必要に応じて小委員会を設置することができる。
- 第九條 この会の経費は同窓会が負担する。但し都合により会議の度会費を徴収することを得る。
- 第十條 この会則の変更に幹事会の議決を経て三日以上は昭和四十四年五月三日とする。
- 第十一條 昭和四十五年度は七十周年記念事業の計画立案、実施のために、八月二十一日(金)と九月二十二日(水)二回、幹事会が会館ホールを会場として開かれた。長はそれぞれ高柳厚氏、田晋氏。多数の幹事会を得て活潑な意見交換が行なわれた。

われら二十回

遠藤 恭介 (20回)

私たちは大正十年旧上中第廿回の卒業である。五年の秋創立廿周年記念祭を盛大に行つたことが今でも印象に残つてゐる。市外からの通学生は自分たちの村の山林から採取したひびを大八車につんで運びあつた門前に大アーチを作つた。そして同夜は全先生のあだ名を織りこんだデカンショ節をうたいながら祝賀提灯行列をやつて町々を練りあるいた。越中生れの骨なし黙如古巢恋しやまた帰ると言つたたぐいのものでもこれに一年生のとき教わつた英語の尾崎黙如先生が一人新湯の方へ転任され二三年してまた帰つてこられたのを唄つたものである。この調子で全先生のあだ名入りのデカンショ節をやつたのだから警備係の先生もやめさせようとしたが長蛇の列なのでとて鎮圧できなかつた。この間の別所での同期会で談話したまことの話し合つたが一人の作ではなく数人の合作だと言ふことに落ちついた。そしてこんど集まつたときに、全部のうたをみなで思い出して書きとめておこうと言ふことになつた。

卒業間際の二月になつて、欠席者の椅子を燃やしたストップ事件で数名の停学者の友人の停学が永びいて卒業に支障を来しては大変と門前に集めて手分けで各先生を訪問、期日の短縮の嘆願に及んだ。幸い一週間の停学処分ですんだのでみなはつとほした。

いたずらはしたが、一方競技部ではスプリンター田村民治君を擁し、県下の大会では勿論、駒場の農大主催の全国中等学校中距離競争にも優勝した。今うたわれている凱歌はその優勝のとき作られたもので作詞者は一級下の秀才故吉村武雄君である。

野球部も名投手大井源太夫君の鉄腕あり、その年初めに長師を破つて台頭した松商に二対一で惜敗したがもし一年下の荒木捕手の試合中の怪我がなかつたら恐らく優勝してゐたと思つた。

学業の方も遊んだ割合には要領よく、上級進学もその部分は少なかつたが翌年は大部分目指した学校に入学できた。大正末期で未だ戦争ブームもなし配属将校もいなかつたので、年一回の演習はむしろ楽しんで思ひ出てとなり演習の司役主の家

では餅をついて歓迎してくれたりした。

今のような交通地獄もなしまだ電車も開通してゐなかつたので、川西塩田方面の諸君は遠くは別所、青木かた歩いて通学した。雨の日も風の日も歩いて通つたことは心身の鍛練となりまた友情の温床ともなつた。先年集まつたときT君が「俺たちの同期には政治家が一人もいまいよ」と言つたので「それなら」と言つたので「おれをきくと彼は文芸春秋の矢内原忠雄「小さな大学大きな教育」の随筆でクラーク博士を生んだ米國

のアマリスト大学が幾多の科学者や哲学者宗教家を出したが一人の政治家も軍人も出さなかつたことを読んでからだと説明した。戦争の犠牲者は一人なつたが五〇〇人の卒業生中己に及ぶの五十人失つた。毎年東京と郷里で定期同期会を催すが老境に入るとこの会合が何よりまたれる。

この夏は同志四人で桐生市に今も健康に(九十五才)で大学受験生に数学を教えられておられる北村先生(金屋先生)をお尋ねして五十年の昔を懐しんだ。旧き良き時代の思い出はつきない。

昭五会四十周年

記念同級会開催

我々が卒業したのが昭和五年であつたので昭五会といふ。今年が昭和四十五年なので丁度四十周年になる。

十年一昔といふが四十年とかいふ具合。又この二年はもなれば昔の昔の大昔の卒業年令ともなつていれば業というわけだ。その間に大きな変遷があり起伏があつた。同期生は百七十名あつたがその四分の一の四十余名は物故され、現在入院通院中という者も数名いる。幸い健康にも恵まれ仕事をさしきることの出来た者三十余名が九月七日千曲河畔の「美弥」に集まり四

顔を出した者も三四名居て誰も名前がわからない。自己紹介をした時「あゝあれか」とか「変つたな」とかいう具合。又この二年は停年命令ともなつていればその後の消息もききたい、そのうえ家庭の事から息子が娘の嫁婿の世話を願うこととまでとび出す、なにしろ天気はいいし鮎はうまい。飲むほどに酔ふほどに話に花が咲きつくることを知れない。漸く宵やみの迫るころ別れを惜しみ、再会を約して家路についた。

(竹内記)

青々会便り

第39回卒業生

会長 西沢 弥 八

青々会の名付け親は恩師笠死者三名、計五十一名の多井南村先生で、日本漢詩会ききのほり、生き残り現在の第一号者で曾て上田中学員一三八名で、約三割の物の青々会には毎年出席され、この五一年柱の青々会に於ては、立派な慰霊祭を信濃国分寺で開いて、その都度、立派な慰霊祭を信濃国分寺で開いて下される。青々会とは、常にかつて盛んな態を云う、と南村先生の説明が付いている。

昭和十五年卒業當時は、一八九名在籍したが、たまたま大東亜戦争勃発するや、卒業三十周年を記念して、月二十一日上田温泉にて、第二回の法要を営むと共に、同期生の菊地博医学博士による「成人病と吾々世の健康官理について」が、即ち戦死者二八名、病と題する講演会を開催し、好評を得た。

またこの三十周年を記念して、大先輩小山敬三画伯揮毫による書額を母校へ献納した。西沢、小林正副会長にて小津俊直校長に手渡すに飾ることになつた。

昭和二十八年より毎年一回必ず例会を開き今年で十六回

ただが旧校長の清水次郎生も、毎回欠かさず出席いただいているのもこの特長といえよう。

卒業後、三十年の歳月は、水のように過ぎ去つたとは、恩師がなご健在で、々に今もつて数多くの教を説き、行く末を見守つていることに感激しつつ、折るばかりである。笠井村先生は今年の六月青々会に出席され、会員一人一人に左記漢詩を扇子に書かれて、寄贈された。この子愛、情熱には会員一同た慟哭あるのみ。

訪上田以青々会諸子  
南村 笠井 輝男  
太郎山下 伍三 青衿一  
千曲川 辺啓二 赤心一  
山水 猶今記 吾否  
白頭短髪 不勝 簪

上田高等学校  
創立七十年を祝う歌  
小宮山精 (16回)

一 古き土塀は 語るらん  
歴史はながし 七十年  
いや榮えゆく 上田高  
幾多学徒を 育みし  
上中松尾の 名も高き  
誉受けつぐ 上田高  
昔真田の 城の趾  
学びし学徒 いくばくぞ  
校旗輝く 上田高  
今は懐かし わが母校  
思いは同じ 同窓の  
集いて祝う 上田高

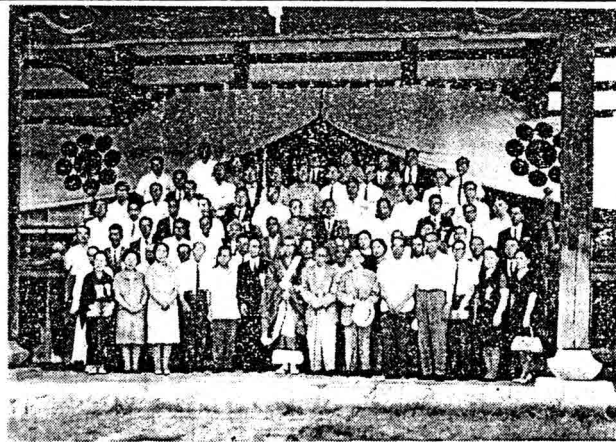
(注)青衿(せいぎん) 赤心  
不勝簪は冠をとるためのかんざし。  
んざしもさすことよ  
来ないくらく白頭短髪  
なつてしまつた意。

青々会役員左の通り  
会長 西沢 弥八  
副会長 小林 睦雷  
会計 山極 正三  
幹事 萩原 秀三  
幹事 金子 八郎  
幹事 倉沢 秀一  
幹事 小山 正三  
幹事 大西 正三

### 三八会について

宮崎盛登

三八会といえは、三八式歩兵銃を連想される同窓生も多いと思うが、われわれは、戦争も漸く激烈を加えた昭和十四年三月の、第三十八回の卒業生である。その卒業回がそのまま三八会となつたわけである。三八会は、毎年八月十五日を定例開催日と定めてあり、その日は全国各地より万障差しくり集まつて来る。野明潔尚先生を迎え盛大に行われた。会の当番はその遺族の所在調査等には



三十八会といえは、三八式歩兵銃を連想される同窓生も多... (text continues from the previous column)

穂谷潔君の涙ぐましい努力の賜である。その甲斐あつて八月十五日には新田の呈蓮寺において、同期の横内静雄君と敵父横内浄普大僧正のお二人の導師に慰霊法要をおこなうことができた。恩師高野豊文、柳沢延房、野明潔、有川広志の諸先生の御参列を頂き、なお福島貞一先生の御遺族は、はるる滋賀県から御列席を頂いた。当日の御遺族各位のよこごびと、感慨に耐えたる姿を眼のあたりにし、このよ様な行事を行うこと、は、われわれ生きていく者のつとめであると思つた。三八会は戦後すでに慰霊法要を三回行つてきたが、そのつとめやつてよかつたとしてみじみと思ふことである。輩は禿頭、白髪も忘れ、その

### 新京上中会

中村加治馬(23回)

昭和十年だつたと思う。夏の一夜新京ダイヤ街の料亭で新京在住の上田中学出身者が集つて上中会を開いた。その当時皆の世話をしてくれたのは十七期の大森美雄氏(医師)と十九期の故小胎今朝治郎氏(國務院総務庁総務科長後佳木斯副市長)であつた。お客さんは丁度新京を来訪された十四期故久保田智氏(当時海軍中佐後中將)であつた。集つた

この意味においても上田高、顧みて他をいう類のこの校七十周年という意義あるとは許されたい。歩みを、足を踏み止めて省みることも大事なことではあるまいか。何故ならば毎年同窓会総会といつても、せいぜい五十人位が集まつて、ひそやかに総会がくり返されているという事実である。勿論このことは、われわれ同窓生すべての責任であらう。当時どんなことを語り合ったかは思い出せないが

### 万国博余情

峯村英薫

いまはなきエジプトの名を懐しみナイル諸国の館もめぐりぬ。アントニオ魅了してふおもかげをホステスの美に求めしは思か。パッセーデの花も賞でつゝ小国の展示ばかりが入り易うごく歩道ダイダラザウルス末来都市みな好ましといふにはあらず。流人のなげき影も示されずシベリアは大開発のパノラマに觀き。採りて来し石はちいさし月の名のロマンよ常に鮮しくあれ。大国の展示には稍々反発ししはし戀ひき水あるゾーンに。いくさまだ絶えぬ諸国も加わりて世界の祭遂に終りぬ。飲会の思ひ出の灯を持ちかへりともせ世界のはての夜毎に。毀つべき日も近づきて白き塔秋風の野の空に光れり

## 関齒科医院

齒科医師 関 勇吾 (48回卒)  
上田市上田原894  
Tel 2-6183

## 春原外科医院

醫師 春原輝正 (48回卒)  
上田市上田原870の14  
Tel 上田 ③-1240

昭和十九年卒業

四十三期会報告

「七十」という年を母校「上中」が迎えた。「人生七十古来稀なり」とは古人七律の一聯中に見える一句だが、その稀な年七十才を迎えた「上中」が四十三才の時、われらはこの松尾ヶ丘から巣立つた。「中央公論」や「改造」に廃刊命令が下り、B29が初めて日本の空の上に八十機の大編隊で火の雨を降らせた年である。それから二十数年、いつかわれらも、われらを送り出した当時の「上中」の齢よりも多い年輪を、個々の人生の樹幹の中に作り出した。時に及んで多少の感慨母校愛着の念と化して油然とするも亦故なしとす。時の流れ・人の情のしからしむるところか、同期生相寄ればやはりその口の端に上るものは当往の「上中(上高)」のことであり、そこに同じ年月を送った師友一人一人のことどもである。

四十三回卒業生の同期会も、昭和四十一年にその集いのきつかけが作られて以来、そのつど縁の下の支えをしてくれる「難有」い人達のおかげで今年でも五回目。回を重ね年を追うごとに盛んになる。そして年々十人前後の新顔?が県内

外よりこの会に駆せ加わるのが例となつた。多士済々、洋の東西を股にかけ、その美女千人斬りの大悲願成就の間近きを隠んで報告に及ぶ豪傑が現われるかと、思ふと、テーマの会社の宣伝をぶち上げて一座を煙に巻く社長どのもござる。酒

臨上田高校

創立七十周年記念式典有感

雨村 細川武敏(41回)

青衿曾学此 青衿かつて此に学び 出入す 古城の門 雪案 生成の徳 螢窓 長育の恩 歎談 師訓に及び 宴飲 金樽を引く 醉想当年事 酔うて想ふ当年の事 白駒 隙を過ぎて奔る

と女ほど素晴らしいモノは、会によつて、思い出の涙のやいと謳歌するのが出て来るとかと思うと、胃弱であつたかと思つたら弱気に愚つた。儀終つてのちは恒例の同期会。今年のことに限つたことではないが、同期会で話し合

くださつた。下島先生は東京でその機に思まれざる不都合を託つていらつしや。柄沢先生は潑刺この会に昨年も今年も臨んでくださった。そして、今年のことやを言へば、この八月、卒業以年幽明境を異にした組担任恩師の横沢、山本、兼子、藤沢四先生および同期十七君併せて二十一の御霊追悼法要の儀を、名利風幡山竜洞院で同期会に先だつて相営んだ。遺族の方々も含めた六十余名の師友の参

つているとゴマンオ頭や秃げ頭、酒焼け顔や嫩くちや顔の中から、フツと動作に出る首の振り方や身振り手振りその声音を通して、往事の童顔であつた友が二重写しに見え始めてくる。話はずんばずんば専務も何もあつたものではない。そこには昔の懐しい友がいるだけ、一つの同じ思い出に繋がる友同志の醍醐味が心よ

一六会

(第四十一回生)

開戦の年昭和十六年度卒業の我々第四十一回同期生会は毎年必ず新春二日に会合します。終戦後毎年、一回も缺かすことなく現在に至つています。卒業当時のA・B・C・D四級が順次当番となりその責任者は関係の深かつた恩師をお招きし、同期生全員に案内する

田高校にも。(平松記) (小島栄三記)

高野外科医院

医師 高野 利一郎(48回卒) 上田市秋和493 Tel (2) - 8266

斉藤医院

(外科 胃腸科) 医師 斉藤 元康(51回卒) 上田市蒼久保1177 Tel 上田(5) - 0887

信州清酒



長野県上田市下塩尻35 沓掛酒造株式会社 社長 沓掛 信敏(第42回)

